

## 3-2-1. リスボンからサル島のエスパルゴスへ

2009年の2月19日、リスボン空港から、21時55分発の飛行機で、カーボベルデの「玄関口」となっているサル島に向かう。同じ飛行機に乗り込もうとしているのは、観光客、商売人など、実に雑多で、近くの搭乗口には、ダカール行きやブライア（カーボベルデの首都）行きのひとびとが集まっている。飛行機の本数・経路などについての空港内の掲示を見るだけでも、リスボンが、アフリカや南米各地への「窓口」となっていることが分かる。機内の乗客は、携帯電話、デジタルカメラ、ノートパソコン等のさまざまな端末を持ち込み、お気に入りのポップスやロックを聴き、ハリウッド映画の映像を見たり、写真を眺めたり編集したりしている。4時間ほどの飛行で、深夜の空港に到着する。入国するには有料の「査証（ビザ）」が必要で、カーボベルデ共和国の収入源のひとつとなっている。ほとんどの乗客がこの手続きをしていくため（ということは、地元のひとたちが少ないということが分かる）、入国審査には一時間以上がかかった。空港からほど近い、島の中心部の町エスパルゴスのホテルに到着すると、午前3時（ポルトガル時間で午前4時）だった。

強い風と土埃のなか、エスパルゴスの町を歩くと、「この島では最大の町」ということもあって多くの店があったが、ショーウィンドーは存在せず、すべての品物は扉の奥に置かれている。町を歩いていると、子供たちがカーニバルの練習をしている光景に出会う。店では子供たちのための様々な衣装が売られていて、思い思いの衣装を着た子供たちが広場に集まってきている。衣装を持たない子供は、自分で段ボール箱をくりぬいて、「かぶりもの」をしている。母と娘という組み合わせが多いが、父親の姿も見られ、ビデオカメラや写真におさめている大人たちも少なくない。

ホテルを出て、エスパルゴスの東側に位置する製塩所跡（Pedra de Lume）[写真1]を見学する。現在では製塩工場の機能としてではなく、観光客がやって来て、「泥パックをして日光浴」をするなどの観光目的で使われている。製塩工場はフランス人の経営で、観光開発はイタリア



写真1 製塩所の跡地



写真2 サル島の港町バルメイラ

人によっておこなわれている。西岸の町パルメイラ (Palmeira) にいき、石油会社シェルの石油備蓄基地の隣に、漁師の漁港、さらにその横には貨物船という風景に遭遇する [写真2]。

「カーボベルデの土地は貧しく国民の多くは海外に移民して働く」という解説は、現実の一部を言い表してはいるが、実際に強い風と日差しと土埃のなかを歩いてみると、アフリカの各地やブラジルから働きに来てここで暮らすひとたちがいる。「大航海時代」には、大西洋を航海する帆船の「停泊地」であり、その後は、プロペラ旅客機によるヨーロッパからブラジルへの旅の中継基地の役割をもっていた。そうした役割は、いまではなくなってしまったかのように見えるが、実際の暮らしのなかでは、ブラジルとアフリカとヨーロッパ（特にポルトガルなどの南ヨーロッパ）の世界がここに集まって、ぶつかりあい、混じり合っている。夕食は、ミンデロの中心部の二階にある「寡黙で実直な昔風の給仕」がいる古びたレストランにて、カチュパ・リカ (Catcupa rica, とうもろこし, 豆, 野菜, 肉のごった煮料理の豪華版) を食べる。食後、街を歩いていると、近くの広場で十代の子供たちが集まって大音量でカーニバルの音楽をかけて踊っている。

### 3-2-2. サンティアゴ島へ

サル島から、サン・ヴィセンテ島とサント・アンタン島に移動し<sup>17)</sup>、さらに首都プライアのあるサンティアゴ島へと出発した。サン・ヴィセンテ島の空港は、コンピューターは故障していて、マニュアルの作業でチェックインし、手書きのチケットを受け取る。搭乗した旅客機は、サル島からサン・ヴィセンテ島に移動したときの42人乗りの機体よりも少し大きな68人乗りであった。サンティアゴ島の空港は、見た目は新しく、設備も整えられていたが、飛行機会社の窓口やインフォメーションは予定の時間となっても係員はやって来ない。プライアの街の歴史的中心街は、プラトー（高台）の上であり、外敵からの防御を考えられたつくりとなっている。ホテルの前につくと、年配の男性がやって来て、タクシーの運転手さんの手を払いのけて荷物を運ぼうとする。ホテルの扉は嚴重に閉められていて、何者かを確認してからやっと開けてもらい、運転手さんの助けでなんとか扉の内側に荷物を運び込みこむが、さきほどの男性もついてきて、なかば口論となった。メルレルが小銭をわたしてなんとか退散してもらおう。ホテルのなかに入ると、フロントの青年は寡黙で、床や部屋も清潔、外の街路とは異なる時間が流れていた。ただ部屋に入ってみると、このホテルのすべての部屋は外側に窓がない構造で、これはおそらく、強い直射日光を避けるためのものであろうと考えられた。しかし、窓がひとつもない部屋で数日を過ごすことは精神的に厳しいと感じられたため、このホテルも含めて、旅行代理店やレンタカー屋などを経営している会社の本店にいて、もうひとつのホテルにいき、窓のある部屋を確保してもらおう。たいへん恰幅のよい女性経営者がすべてをとりしきっており、愛想のよい男性が忙しく働いている。移動してみると、部屋はやや汚れていて、ランプ

などがほとんどきれていたため、なんとか調整してもらってやっと一段落する。シャワーは、熱湯がごくわずか出るだけで、トイレからの悪臭は強く、トイレトペーパーがなくなっても新しいものをもらうことがとても困難であった（ペーパーの使用は「経営者の指示」によって厳しくおさえられていた）。なんとか宿泊可能な状態にまでもっていくのには、かなりの交渉が必要となった。フロントにいるのは十代の女性で、ほとんどの時間は、彼氏とホテルの電話で話しているため、なかなか応対してもらえない。こちらのホテルも、正面玄関の扉はきちんとしめられているが、時折、ひとの出入りの合間をとらえて、小銭をせびる子供たちが入ってくる。そして、何かをもらえるまでは決して立ち去ろうとせず食い下がる。

エスパルゴスからミンデロ、そして首都プライアにやって来たが、これまでの街とまったく雰囲気が違うと感じていることをメルレルたちと確認する<sup>18)</sup>。道を訪ねても最初の二人は応答せず、三人目のひとは言葉を発せず首を少し動かして「こっち」だという合図をしてくれたがその情報は間違っていた。やっと談笑する若い女性二人に正しい道を教えてもらう。ともあれ、緊張感を保ちながら、少し街を歩く。歴史的な中心街の一角には、セネガルやアメリカの大使館、新市街にはドイツやフランスの大使館がある。20世紀初頭頃のコロニアルスタイルの建物は、とてもしっかりした作りで、同じ街のなかでまったく異なった雰囲気の街並みとなっている。さらに少しくくと、ポルトガル統治時代につくられた高校の建物があり、メルレルによれば、自分たちの「偉大さ」を誇示するための新古典主義的な建築物で、この他にもプライアには多くの病院が見られたが、ポルトガルは、植民地での病院と学校の建築に力を入れていたのだという。

プライア到着の翌日、メルレルに運転してもらい、プライアの歴史的な中心街から新市街へとくだっていき、街の様子を見る。新市街には、歴史的な中心街に入りきれない政府の建物や各国の大使館（スペイン、中国、ロシア、国連、ブラジル、フランス、ナミビア、ポルトガルなど）が林立し、しかもそのすぐ側には、アフリカの諸地域からやって来たひとたちが住む貧民街と、ミドルクラス用の高層マンションが隣接している。土埃と砂利のなかに無秩序に建物が並ぶダウンタウンのすぐ横のアップタウンでは、アスファルト道路にきちんと区画された高層建築が並んでいる。なんという対比！歴史的な中心街がかろうじてひとつのまとまりを保っているのと比較すると、新市街は、まったく無秩序に拡散している。ポルトガルとアフリカの間に生まれたひとたち（「クレオール」）の数は少なく、アフリカ系のひとびとの存在が圧倒的である。

プライアの新市街を出て、ポルトガル語で「古い都市」を意味する町シダデー・ヴェーリャ（Cidade Velha）へと向かう。新市街を出ると、ポルトガルの統治時代に整備された石畳の道と石のガードレールがずっとつづいている。ポルトガル統治下、地域住民の仕事を確保するための公共事業として、道づくりは推奨されていたという。現在のシダデー・ヴェーリャは、少しの観光と農業・漁業をするだけの小さな町となっているが、大航海時代の重要な植民都市であ

るリベイラ・グランデが建設された場所であった。この場所にあった要塞、教会、修道院などはすべて朽ち果てた状態だったが、この十年ほどの間に、「世界遺産」として「再発見」され、スペインからの支援で、新たな観光地として「再開発」されている。

フィリペ二世の治下にあった 1587 年、キャプテン・ドレイクたち海賊の攻撃にそなえるために造られた要塞は、ほぼ完全に修復され観光地となっている。1556 年に建設が始まったカテドラルは、現在も「瓦礫」のままとなっているが、1512 年にポルトガルから石も含めたすべての材料が運ばれ建設された大理石の柱は、現在も中心的広場のシンボルとなっている。ここには、セネガルからやって来た物売りが待ちかまえ、観光客たちが「つかまって」いる。15 世紀に建設が始まった古い街路である「バナナ通り」は、「1545 年にすでに 500 軒以上の石の家が並んでいた」と書かれている。1495 年に建設が始まったカーポベルデでもっとも古い教会であるロザリオ教会と、1640 年に建設されたフランシスコ会の教会と修道院は、文化的のみならず職業訓練の場としても機能しており、1712 年に海賊によって破壊されたが、1999 年から修復作業がおこなわれ、観光スポットとなった。その他、宿泊所などもあり、バナナ、マンゴー、甘薯、キャッサバ、サトウキビなどが栽培されている。

(高台から見た後に谷底からも見てみる)

私たちは、まず、市街から少し離れた場所にあつて、海岸部とリベイラ・グランデの谷底部分を見渡すことが出来る要塞にいき、この場所の全体像を概観した [写真 3]。上から見ると、切り立った断崖によって囲まれていて、ひとびとの声や、鶏や山羊の鳴き声がひびいてきてい



写真 3 高台の要塞から谷底を見る



写真 4 谷底から高台を見る

る。雨が降ったらその水を吸収出来るつくりとなっているこの谷の豊かさが実感出来る。つづいて、市内へと入り、各種の「世界遺産」を見ていったが、実際に歩くと、木々の緑によって強い太陽光線から土が守られ、濃い緑と背が高い木々が茂り、整備された耕作地が可能となることをあらためて感得することが出来る [写真4]。

食事をした後、島の内陸部へと入っていく。標識もなく、崖崩れをしかけた道の先を聞いても、道行く人は、教えてくれようとする気持ちはあってもなかなか伝わらない（「そっち」「あっち」「どンドン」「ちょっと」などの片言か、首を少しかしげるといった反応がかえってくる）。当初は予定していなかった集落に入り込んでしまい、道は崖崩れで岩がころがっていて、ガードレールもなく、石積みであるため、普通車でいくのはとても困難であった。それでも地図と釘付けになって、なんとか内陸部への道を捜そうとして、何度も道を間違え、人に会うたびに道を聞きつつ進んだが、日没が近づき、悪路のなかで立ち往生し、いろいろ考えた末、もとの道をひきかえすという選択をするに至った。

もと来た道を帰る途中で、葬式のために十数台の車をつらねて移動する集団に何度も出くわす。この島では、葬式は8日間にわたっておこなわれ、その間ずっと親族や友人たちは集まって飲み食いをつづける。出費はたいへんなもので、政府が補助金を出しているが、それでも足りずに、地域の住民たち同士で、「頼母子講」（「無尽」「模合」）のようなものをやって突然の葬儀にそなえている。

（島の北西部へと向かう）

次の日に向かったサンティアゴ島北西部への道は、アスファルトで舗装されていて順調に進む。この舗装道路に沿っての道では、少し標高があがって植物が群生している場所に出ると、とぎれることなく人家を見ることが出来た。交通量も多く、大型トラックがひっきりなしに通り過ぎる。これまでの島々で見えてきた光景とは異なる人口密度と物資の集中が見てとれた。内陸の町サント・ドミンゴス（S. Domingos）の教会を訪ねると、ポルトガルの北部の町からこの地にやって来て五十数年というアントニオ神父に教会を案内してもらう。この町を出る頃には、ちょうどお昼頃で、子供たちが学校を終えて帰路につく行列に出会った。メルレルによれば、学校は2交代制で、午前の部と午後の部のグループにわかれている。車で迎えに来てくれる親もいないわけではないが、子供たちは、かなりの距離（10km くらい）を歩いて学校に通う。農村部に学校をつくるのが困難だった他の島の状況よりはるかによい条件だ。尖った岩と教会が遠くからでもとても目立っていたピコス（Picos）という町では、帰路につく生徒と登校する生徒の両方でごったがえしていた。内陸部の中核都市アソマーダ（Assomada, 人口1万2,000～3,000人）で、レストランを見つけ食事をすると、隣の席には、この町にある私立サンティアゴ大学で社会科学系の科目を教えている大学教員のグループに遭遇する。土地のひとた

ちがTシャツでいるのに比して、彼らだけは、黒づくめのスーツにネクタイをしめ、周囲から自分たちを「峻別」していた。

ここから少しいくと、ついにアスファルト道路は途切れて、ふたたび石畳の道となる。人家もまばらとなり、他の島々の農村部と近い光景となってきた。途中、ロバをつれて水汲みに向かう5歳くらいの子供たちに何度も出会う。途中、「ポルトガルの独裁者」だったサラザールの政権時代に政治犯を収容し緩慢なる死を強要していた刑務所に立ち寄り（プライアからやって来た医師たちは、囚人の治療を一切することなく、ただ死亡証明書を書くためだけにここにいた）、北端の町タラファル（Tarrafal）へと到着した。

（少し慣れてから旧市街と新市街を歩く）

島内をひととおりにまわって、かなり慣れてきたところで、今度はゆっくりと首都プライアの旧市街を歩く。そうすると最初は気がつかないものに出会ったりもする。事実、この時も、偶然に通りにかかった「建国の父カブラルを顕彰するための財団（Fundação Amílcar Cabral）」にて、たいへんな歓待を受け、2004年のカブラル国際シンポジウムをまとめた分厚い本をいただいた。プラトー（高台）の歴史的な中心街から城壁を出て外に降りてくると、ダウンタウンには、貧民街があると同時に、大使館街や高級住宅地も造られている。セネガルなどの国々からはひとの移動・交換の圧力が、国際協力と世界遺産はスペインの、ワイン生産にはイタリアの、文化はフランスからの圧力が強く入ってきている。

（国立カーボベルデ大学へ）

国立カーボベルデ大学はまだ創立して二年ほどで、理学部、工学部、社会科学部、経営学部、教員養成学部、文学部などが設置されている。40代前半の学長の話によれば、次々と「グローバルな」私立大学が開設し、かなり厳しい競争が存在している（プライアに着いたときに見た新聞記事では、8000人が高等教育を受けているとのことだった）。「キャンパスは複数の島にまたがっていて、財政的問題を常にかかえており、各島の農村部に学校をつくることは困難だ。だからひとびとは、都市部へと『逃散』していくのです。」農業の専門家を養成する学校（scuola professionale）はフォゴ島にしかなく、大学にも農業を専門化して教える場所（学科・専攻）が存在していない。ポルトガルからやって来た私立大学は、「情報についての専門的技術が身につきます」という幻想をふりまいて、「カーボベルデ人のなけなしのお金をうばい取るためだけに存在しているようなものだ」。

大学人として地域社会への責任を考えざるを得ないという学長は、「カーボベルデの学者にとって、あなたたちのお話、島の諸地域の固有性をどのように生かしていくのかというお話はとても興味深いのです。島にある大学同士がつながりをつくること出来ればありがたい」と

話した。メルレルから、アフリカ、ヨーロッパの地中海沿岸諸国の大学院レベルのサマースクールの話が出ると、これにアゾレス、マデイラ、カーボベルデ、アフリカ、ブラジルといった大西洋諸地域の大学を加えることが出来ないかという話へと広がった<sup>19)</sup>。この後、社会科学系の3名の学部長（地理学、心理学、社会工学など）と観光についての話をすると、「サル島の塩田観光やサンティアゴ島の要塞観光は、地域生活に何の寄与ももたらさない。巨大企業による介入で、プラスチックやゴミ袋を散乱させるだけになってしまっている。村々の生活を救わないといけないのです。次に来るときは、フォゴ島とブラバ島を見てください。ぜひ夏に来てほしい、夏に来れば緑はもっと濃くなるのだから」と熱をこめて語った。

（同じ場所に存在する徹底して異なる食生活）

昼食は、昨日カーボベルデ大学のスタッフに教えてもらったブラジル大使館近くにあつて地元魚をグリルにして出すことで知られているというレストランに向かう[写真5]。カーボベルデのタクシーのほとんどは、TOYOTAの新しい車だが、私たちが乗った車は、窓の開閉装置がこわれていて、運転者の若者は、しばらく右往左往した後、別のタクシーの運転手に場所を聞いてどうにか行きつく。レストランに入ってみると、大使館街と中高級住宅地に隣接した場所にあつて、なかに入ってみると、レミーマルタンなどが置いてある飾り棚に敷かれているのは紙ナプキンで、テーブルは、化繊のテーブルクロスの上に透明ビニールがかけられている。ミンデロやアソマーダで入ったレストランが、古風なコロニアルスタイルで、布のクロス付きのナプキンやテーブルクロスと、古いがよく磨かれたナイフやフォークが使われていたのとは異なる様相を呈していた。店内には、この土地では高価なはずのワインを何本も注文して食べきれないほどのグリル料理[写真6]をテーブルに並べているグループや、街で出会う若者たちとは一線を画する優雅な服装をした若いカップルなどが食事をしている。ビールは、こちらに来てはじめて飲む「生ビール」で、カーボベルデのビール（Strela）の味ではなく、水も地元



写真5 大使館近くのシーフードレストラン



写真6 魚のグリル料理



写真7 植林された土地



写真8 私立大学の看板

の水 (Trindade : agua de mesa) ではなく、ポルトガルから輸入されている水 (Luso) である。エビの料理は、地元のひとたちが食べる簡易食堂では郷土料理のカチュパが 30 から 50 エスクード (40 ~ 60 円くらい) と比べると、一品で 1,800 エスクード (2,000 円強) という「破格」の値段であった。

エビやカニなど海の幸の料理と大量のワインを目の前にした若い父親は、動画が写せる最新式の携帯電話で、カーニバルの風景を家族に見せている。もちろんこれは惑星規模のマクロ・トレンドだが、メルッチが言っていたように、「選択のパラドクス」のなかで、最新の端末によって「自分」を探す。そして気がつくと、私たち自身が、この「自由な」「新世界」の端末のひとつとなっている。

昼食の後、レストラン近くのフランス大使館、ブラジル大使館などの横を通りつつ、歴史的中心街までもどる。海外沿いの土地は、植林された跡があり、この厳しい土地にかろうじて人間の手が加えられることで、緑の木立と畑は、ぎりぎりの線で保たれていることが見て取れる [写真7]。砂浜には、新しく建造された漁船があり、「世界にはばたく」私立サンティアゴ大学の大きな看板も建てられていた [写真8]。

### 3-3. 現在を生きる「カーボベルデ人」

(生成する「カーボベルデ人」)

カーボベルデに向かう前のリスボンでの新リスボン大学の研究者との話しあいのなかでも、くり返し言及されたことだが、「カーボベルデ人」というのは、人種・民族ではない。「カーボベルデ人」とは、「発見」「植民」「混交」「独立」などの体験を経て国をつくったひとたちの共通の体験 (R. ベラーの言葉で言えば「記憶の共同体」<sup>20)</sup> をあらわす言葉であった。しかもこの共通の体験は、個々人の身体の内側に“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろし”ているものとして、複数性を持ち、“不協の多声 (polifonia disfonica)” とともに、生成されつ